【318】

氏名（本籍）	鶴見良次（東京都）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博乙第1776号
学位授与年月日	平成13年11月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	フランス革命論争と妖精物語論争 社会改革期のイギリスにおける子供の読書

主査	筑波大学教授	博士（文学）	荒木正純
副査	筑波大学教授		井上修一
副査	筑波大学教授	D．L．	川那部保明
副査	成城大学教授		富山太佳夫

論文の内容の要旨

本論文の構成は，つぎのとおり。

序論
第1章　児童小説の誕生と博愛主義－『靴二つさんの物語』
第2章　妖精物語の動物観と動物虐待防止運動－ペロー童話集初期英訳版「長靴をはいた猫」
第3章　パントマイムと市民道徳－トマス・ティブディン『ハーレクィンとマザー・グース』
第4章　ブロードサイド・バラッド，童謡とフランス革命論争－
　　『豚のごとき預言者』，セアラ・マーティン『マザー・ハバードとその犬』
第5章　児童文芸批評の成立と反ジャコバン主義－セアラ・トリマー編『教育守護者』
第6章　人形芝居と感受性廃止運動－『バンチとジュディ』
第7章　児童詩と奴隷制廃止運動－アミーリア・オービー『黒人の嘆き』
第8章　ピューリタン児童文芸の衰退とトラクトの国際的普及－アイザック・ウォッツ『聖なる歌』
結論

序論は，今日，労働者階級出身の著者の青春期の伝記文学として古典的地位をえている，政治活動家サミュエル・バンフォードの自伝『少年時代』（1848－49年）が，1800年前後の労働者階級の子供の道徳・教育・読書等の事情を知るうえで貴重な資料となっているとの指摘にはじまる。ついで，本論文が，いわゆる〈児童文学〉の誕生をめぐる研究であり，また，フランス革命（1789年）から奴隷制廃止の決定（1833年）までに，当時の道徳や社会規模の形成が，どのように子供を含めた民衆の読書体験とかかわりをもっていたかを追究する歴史的研究であると自己規定したのち，先行研究の整理がなされ，さらに本論文の概要がしめされている。

第1章は，今日の子供向けの本に出てくる登場人物たち（魔女・妖精・物言う動物・弱い物を虐げる権力者・理不尽な大人の男・機知に富んだ愛嬌ある老女・律儀な女教師・健気で慈善心あふれる努力家少女・冒険心に富んだ勇敢な少年など）が，18世紀後半から19世紀初期にでそろったことを指摘し，これらの登場人物のほぼすべてを擁しているのがジョン・ニューベリーの『靴二つさんの物語』であるという。そして，この物語の分析を介し，

伝統的共同体文化の民衆〈道徳〉が，中流階級主導の〈道徳〉改革運動によってどのように変化し，またこれと平行して，どのように〈児童文学〉という新しいジャンルが成立したかを論じている。

第2章は，18世紀後半以来，子供の読み物に繰り返しあらわれた中心的主題のひとつ〈動物虐待防止の理念〉が，いかに妖精物語や寓話などにでてくる動物の表現に影響をあたえていたかを論じている。具体的には，シャルル・ペローの物語「長靴をはいた猫」の様々なヴァージョンを検討し，〈古い文化〉における動物像（驚異としての獣）が，いかに〈新しい道徳や感受性〉の改革にこの時代に変容したかを追求している。

第3章は，第2章で問題化された〈古い文化〉と〈新しい文化〉との遭遇の例が，お伽芝居パントマイムにおいて検証されている。分析対象のパントマイムの『ハーレクィンとマザー・グース』(1806年）は，妖精物語の世界観，魔女信仰の残滓，さらには中流階級の社会階層認識・道徳観などが混在し，この時期の民衆娯楽の性質を特徴的にしめしていることを論証している。

第4章は，また別の事例を古くからある言葉や数字を理解する〈動物学者〉の大道芸に求め，これが同時期にロンドンの市や繁華街で大評判となった事情が，多様な文書の分析のもとに詳細に語られている。そしてこれらの動物は，〈大人〉と〈子供〉，〈上級階級〉と〈下層階級〉，〈学識文化〉と〈民衆文化〉，〈都市〉と〈地方〉，〈科学〉と〈迷信〉，〈娯楽〉と〈慈善〉，〈秩序〉と〈混乱〉，〈革命〉と〈反革命〉などの矛盾する要素を表象する特異な存在であったと論じている。

第5章は，フランス革命に影響されて出現した急進的政治思想への批判が，王権擁護派のトーリー党系の反革命雑誌『反ジャコバン』を介して熾烈さを増し，ついでその思想が子供に対する宗教・道徳教育に悪影響を及ぼすとする言説を形成したことを指摘している。そして，ロマン主義者の妖精物語擁護論に対して徹底的な反論を加え，〈妖精物語論争〉を展開した国教会福音派の慈善活動家セアラ・トリマーが創刊した雑誌『教育守護者』を典型的実例として分析し，同誌の創刊によって，近代的な児童文学批評や児童文学観が成立したと論じている。

フランス革命をイギリスの多くの庶民は，政治風刺漫画などを介して革命家の暴力的秩序破壊行為として興奮と脅威をもって受け止めたが，そうした状況の表象として，第6章は人形芝居「パンチとジュディ」を吟味・分析している。いかなる権威・権力をも恐れない民衆のヒーローであったパンチは，実は，女性や子供への暴力，自己中心的で横暴な態度，そして宗教的・法的権威の無視を特徴とし，革命を恐れ嫌悪した中流階級の道徳意識と矛盾するものと指摘している。

第7章は，社会的暴力や残忍行為に道徳的規制を加えようとする博愛主義的社会運動のひとつの柱であった奴隷制廃止運動が，いかなる言説を形成したかを探り，クエーカーの慈善活動家アミーリア・オーピーの『黒人の嘆き，あるいは砂糖はどのように作られるのか』(1826年）に例をとり論証している。

第8章は，バプティストの牧師アイザック・ウォッツの著した子供向け賛美歌集『聖なる歌』(1715年）が，200年の間，驚異的に流布し，どのようにイギリス国内や大英帝国の勢力圏の子供たちに共有され，それぞれの土地の言語・宗教・道徳の〈イギリス化〉に寄与したかを論じている。

結論では，本論文の成果と限界が指摘され，その範囲内で，社会改革期の道徳や社会規範の変容と形成の文脈において，子供の読み物と読書の果たした役割が明らかになったとされている。

審査の結果の要旨

本論文は，今日，イギリスで一般に〈児童文学〉と呼ばれている近代的な子供向け読み物が，1800年前後におこった〈産業革命〉と〈フランス革命〉によって誘発された〈道徳革命〉の多様な社会改革運動のなかで，その運動の言説を構成するものとして，また，その言説のもとに新たな読みを要請するテクストとして書かれ，書き直され，流布し，読まれ，記憶されたものであるとし，この過程がいかなるものであったかを多数の一次資料をてがかりに，地道に具体的に考究した優れた第1級の論文であり，学界に寄与するところ大であると認められる。

本論文は，自らを〈児童文学〉研究であると規定してはいるが，この分野の従来の枠をはるかに越え，〈児童文学〉を資料とする新歴史主義的な表象研究となり，国際的にも通用するものとなっている。ちなみに，本論文の一部は，すでにイギリスのフォークロア・ソサエティの学会誌『フォークロア』(1990年）に掲載され，高い評価を受けた論文がもとになっており，『英国フォークロア辞典』（オクスフォード大学出版局刊，2000年）で言及されてもいる。本論文の着想の新鮮さと分析の鋭敏さは驚嘆に値するものであり，また，論証の手順や語り口は，地道で説得力に富んでいる。さらに，論証のため資料とされた1次資料のほとんどは，イギリスの図書館で著者みずからが発掘したものであり，この点においても本論文は，関連する研究領域に多大な貢献をするものといえる。

しかし，こうした本論文にも欠点がないわけではない。それは，著者みずからが自覚しているように，資料の網羅的な収集・使用がなされていないことである。研究対象とした資料の総数は，サミュエル・バンフォード少年などの当時の労働者階級の子供の手にした多様・多数の出版物の量にはるかに及ばないという。しかし，この欠点は，今後の更なる調査・研究により埋めることの可能なものであり，決して，本論文の価値を減ずるものとはなっていない。むしろ，誠実な資料の選択と扱い方が印象的であり，これがその欠点を十分に補っていると思える。また，欲張りな注文をつけるなら，著者の対象や資料に対する姿勢が余りにも誠実すぎるため，ダイナミックな仮説や読解がやや不足している。少なくとも，資料として収められた図版についてのもっと詳細な仮説的読解があってもよかった。本論文を本として出版する際には，この点に留意し，よりよいものにされることを期待するものである。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。